



TITLE:

領海制度の歴史的研究(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

高林, 秀雄

CITATION:

高林, 秀雄. 領海制度の歴史的研究. 京都大学, 1966, 法学博士

ISSUE DATE:

1966-11-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/212011>

RIGHT:

【 8 】

氏 名	高 林 秀 雄 たか ばやし ひで お
学 位 の 種 類	法 学 博 士
学 位 記 番 号	論 法 博 第 14 号
学位授与の日付	昭 和 41 年 11 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	領海制度の歴史的的研究

論文調査委員 (主 査)
教 授 田畑茂二郎 教 授 香 西 茂 教 授 太寿堂 鼎

論 文 内 容 の 要 旨

この論文は、第1章領海制度の成立、第2章三カイリ主義と射程距離説、第3章19世紀における領海幅員問題、第4章国際関係における領海三カイリ主義の機能、および第5章海洋法会議の成果、の5章から成っている。

第1章では、領海制度の成立過程を、国際法学説の展開と、国家実行の発展との両面から研究している。すなわち、海洋に対する諸国の主張と、それを正当化する理論とを歴史的に検討することによって、近代的な領海理論が形成されていく経過を明らかにするとともに、領海制度が成立した後も、領海の範囲の問題が解決されるに至らなかった事情を解明している。

第2章は、領海幅員に関する三カイリ主義の起源についての、諸学説の評価にあてられている。つまり、三カイリ主義を射程距離説から発達したものとする伝統説と、三カイリはむしろ射程距離説をしりぞけて採用された全く別個の限界であるとする新説との対立点を明らかにした後、自説を述べている。

第3章では、19世紀における領海幅員の問題が、主として、個々の目的に関する沿岸国の管轄権行使の範囲をめぐる展開されたことを指摘し、領海三カイリ主義が、他国沿岸沖における行動の自由の確保をめざす海洋国側の外交上の理論に転化したと論じている。

第4章では、20世紀初頭から第2次大戦までの時期における領海幅員問題の推移を取扱っている。すなわち、この時期において、海洋国の主張する三カイリ主義が、沿岸国側の抵抗に直面して、貫徹されえなかった経過を叙述している。

第5章では、第2次大戦後における各国の海洋に対する主張が、既存の海洋秩序の変更を求める要求であることに注目し、この事態に対処するため準備された海洋法案が、またも統一した領海幅員を決定するに至らなかったとはいえ、一定の成果を挙げたと論評し、海洋法会議の功罪を明らかにしている。

論文審査の結果の要旨

この論文は、国際法における領海制度の成立・発展の過程を、制度史ならびに学説史の両面から研究することによって、この制度の意義を明らかにするとともに、これが国際関係において果してきた機能を考察したものである。

領海制度の歴史について、わが国で発表されたまとまった著書としては、戦前の横田喜三郎博士著「海洋の自由」があるだけであり、それも、主として公海自由の原則との関係において触れられているにすぎず、本書のように、この制度が独自にもつ歴史を、豊富な資料にもとづき、且つ戦後まもなく展開された新しい論争を十分に咀嚼した上で、体系的に叙述したものはまだ現われていない。本論文のような歴史的研究により、はじめて、今日なお残存する領海幅員の不統一の原因をはじめ、海洋法制度がはらんでいく多くの問題の根源が明らかにされたといってよいであろう。

それ故、本論文の学問的価値は高く評価されるべきであり、法学博士の学位論文に価するものと認める。